

## カール・ロジャーズとB・F・スキナーが1956年におこなった討論に関する研究\*

金 原 俊 輔\*\*

A study of the 1956 debate between Carl Rogers and B.F.Skinner

Shunsuke KANAHARA\*\*

### 要 旨：

1956年、アメリカ心理学会のシンポジウムにおいて、カール・ロジャーズとB・F・スキナーは討論をおこなった。討論は、まずスキナーが用意してきた論文を読み上げ、ついでロジャーズがやはり自分の論文を読み上げ、最後にスキナーが二本目の論文を読み上げて終了、という形式のものであった。主に語られたことは、科学が人間行動のコントロールをするようになる可能性とその是非に関してであった。スキナーは大意「今後、科学によるコントロールを進めることが社会にとって有益である」と述べた。ロジャーズは大意「科学からコントロールを受けるのではなく、人が主体的に科学を選択することが望ましい」旨の反論をした。最後に、スキナーは大意「人が主体的だと思っている行動は、実はコントロールされたものである」と応答した。当該討論の全容は1956年11月の『Science』誌に「Some issues concerning the control of human behavior: A symposium」のタイトルで掲載された。日本では1967(昭和42)年、『ロージャーズ全集・第12巻：人間論』内に「人間行動の統制に関する二、三の問題点：シンポジウム」という表題で収録された。

本論文は、上記討論の要点を翻訳して、どのような意見のやりとりがあったかを概観し、さらに討論に関する諸研究者のコメントを収集・整理したものである。そのうえで討論内容を考察した。論文の冒頭、ロジャーズとスキナーの経歴・業績を簡単にまとめた。

### キーワード：

カール・ロジャーズ、B・F・スキナー、ロジャーズとスキナーの討論、人間行動のコントロール

### 1 カール・ロジャーズ：

カール・ランソム・ロジャーズは、アメリカ合

衆国の臨床心理学者だった。白人男性で、1902年1月、イリノイ州に生まれ、1987年2月、85歳だったときに、カリフォルニア州において心臓発作のため死去した。邦暦表示をすると、明治35年誕生、昭和62年没、である。ウィスコンシン大学農学部に入學したが、同大学の歴史学科に転学科し、1924年に卒業した。牧師を志してユニオン神学校の大学院へ進んだものの、コロンビア大学大学院に移り心理学を専攻、1931年にPh.D.(哲学博士)の学位を取得した。ロチェスター児童虐待防止協会で勤務したのち、オハイオ州立大学、シカゴ大学、ウィスコンシン大学、の教授を歴任した。大学を離れてからは西部行動科学研究所ついで人間研究センターに所属した。クライエント中心療法の創始者として知られ、また、ベーシック・エンカウンター・グループの推進者としても著名だった。人間性心理学という学問的立場に身を置いた。1946年にアメリカ心理学会の会長に選出された。1956年、同学会の「特別科学貢献賞」を受賞し、1972年、同学会「特別職業貢献賞」を受賞した。200本以上の論文を書き、16冊の著書を出版した。妻のヘレンとの間に男女二人の子どもがいた。

### 2 B・F・スキナー：

バラス・フレデリック・スキナーは、アメリカ合衆国の行動主義心理学者だった。白人男性で、1904年3月、ペンシルバニア州に生まれ、1990年8月、86歳だったときに、マサチューセッツ州において白血病のため死去した。邦暦表示をすると、明治37年誕生、平成2年没、である。作家をめざしながらもハミルトン大学卒業後に断念してハーバード大学大学院に進学、心理学を専攻した。1931年にPh.D.(哲学博士)の学位を取得した。ミネソタ大学およびインディアナ大学で教鞭をとったのち、ハーバード大学の教授となった。学習におけるオペラント条件づけの詳細を研究し

\* Received January 29, 2014

\*\* 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 社会福祉学科、Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

たが、「スキナー箱」と呼ばれる実験装置を考案したこと、『ウォールデン・ツール』というユートピア小説を書いたこと、教育効果を高めるための「ティーチング・マシン」を作製したこと、などでも知られている。1968年に「アメリカ国家科学賞」を受賞し、1990年にアメリカ心理学会の「生涯業績賞」を受賞した。論文数や著書数の合計は約200本だった。彼が樹立した学問体系は「行動分析学」と呼ばれ、精神科治療や臨床心理の現場では「行動療法」または「行動変容」として応用されている。妻のイーヴとの間に二人の娘がいた。著書などではB・F・スキナーと称した。

### 3 討論に至るまでの動き：

以下、Cohen (1997) が記述した情報にしたがって、ロジャーズとスキナーが討論をおこなうに至るまでの動きを整理する。

討論を提案したのはスキナーのほうだった。1955年の12月だった。スキナーは、翌1956年のアメリカ心理学会の年次大会<sup>(原注1)</sup>において自身とロジャーズがシンポジウムを開くことを、手紙でロジャーズに申し出た。スキナーはもう一人第三者を交えたシンポジウムの開催を考えていた。第三者を入れようとしたのは、シンポジウムがロジャーズとスキナーの「果たし合い」的な雰囲気になることを避けるための工夫であった。討論自体はロジャーズとスキナーのやりとりをする予定だった。スキナーの原案は、ひとり20分間ずつ話題提供の論文を読む、その論文は事前に両者が目をとおしておく、そしてその後、それぞれが各10分間、相手に対して意見を述べる、というものだった。

ロジャーズはこの提案に賛成した。スキナーのほうが先に論文朗読をするという案を加えた。そうすると後半に回るロジャーズが有利になるからである。このような提案をしたロジャーズを、Cohen (1997) は「抜け目がなく、討論に慣れた論者である (p.157)」と評した。スキナーはその提案を承諾した。

ただちにロジャーズは、多数の若手研究者たちと共に、当該シンポジウムで朗読する論文の執筆を開始した。

1956年7月、ロジャーズは論文草稿の執筆を終え、スキナーに草稿を送った。

1956年8月、スキナーはロジャーズに返事を書き、草稿に好感を持った旨の感想を述べ、シンポジウムは有益なものになるであろうと記した。そ

して、スキナーはシンポジウムの流れの変更を提案した。自分およびロジャーズが25分ずつ論文を朗読し、その後、自分が15分間、反論の論文を読むのはどうか、というものだった。結果的に提案どおりのシンポジウムになったので、ロジャーズは同案を受け入れたと思われる。スキナーはさらに、討論当日の2日前に会って細かなことを調整しようとした。スキナーは「大事なことは、私たちの視点をはっきりさせること (Cohen, 1997, p.158)」で、討論それ自体の良し悪しが比べられたり、お互いの立場を他者に誤って伝えてしまったりすることではない、という思いをもっていたからであった。

1956年9月2日に、ロジャーズとスキナーは会った。記録に残る限りでは、これが二人の最初の直接的な出会いだった。

1956年9月4日、アメリカ心理学会年次大会で配布されたシンポジウム用のチラシには「科学者たちと人間性主義者たちの闘い」という惹句が書かれていた。なぜ「たち」と複数になっていたかについては、おそらく、科学に携わる人々と人間性主義を主張する人々との相互理解がじゅうぶんではない状況がある、という意味がこめられていたのだろう。科学者の代表がスキナーであり、人間性主義者の代表がロジャーズだった。シンポジウムのタイトルは「Some issues concerning the control of human behavior」だった。「人間行動のコントロールに関するいくつかの問題点」という意味である。多数の聴衆が集まった。討論にあたって、ロジャーズもスキナーも「互いに相手の考えをこてんぱんにやっつけよう (コーエン、2008, p.19)」と意気こんでいた。Cohen (1997) は「この討論は、ふたりの人間の個人的なやりとりであることを超えていた。それは、心理学の精髓とは何であるかを決する攻防だった (p.157)」と記した。

以下は、1956年9月4日のシンポジウム当日の討論内容を訳したものである。当該討論は同年「Some issues concerning the control of human behavior: A symposium」(Rogers and Skinner, 1956) という題で公刊されたが、本論文に記述した文章はその全訳ではない。重要と思われる箇所だけを訳した。また、直訳したところと意識したところとが混在している。さらに、公刊された討論を村山正治が翻訳した「人間行動の統制に関する二、三の問題点：シンポジウム」(ロージャーズ、スキナー、1967) に記載されている和文

も参考にした。

#### 4 討論・1 スキナー：

討論は、まず、スキナーから始めた。スキナーの発表は英語原著のページ数でいうと約3ページとなった。使った時間は打ち合わせで決めた25分間前後だったと思われる。科学に対する自分の信念を述べる内容だった。

科学は、人間の行動を予測しコントロールする技術を生みだしている。その具体例が政治学や経済学の分野で見られる。個人の行動を研究対象とする人類学・社会学・心理学も技術の進歩に貢献している。カール・ロジャーズの論文においても心理学による人間のコントロールが実際に提示され示唆されている。(行動科学の)実験的研究は人間行動に関する古くからの考えかたに挑戦しつつある。しかし、この動きに気づいていない心理学者たちがいる。また、科学が人間の行動に与え得る可能性を否定する人たちもいる。それらの人々は、人間は自由であるから人間の行動を律する科学などありえない、個人行動の自由に対して科学的予測は当てはまらない、と主張している。

行動科学者たちもコントロールに関与する仕事をしている事実を自分で認めることをためらっている。彼らは有益なコントロールに関与するような場合でさえ、非難を怖れてコントロールを拒絶するかもしれない。そもそも、歴史を眺めてみても、行動をコントロールしようとする取り組みは評判が悪い。そのような取り組みは人に感情的な反発を引き起こしてきた。たとえば、コントロールに興味をもったマキアヴェッリ<sup>(訳注1)</sup>に対する悪評がその見本である。マキアヴェッリはコントロールされる側に嫌われるような技術を用いようとした。

祝日に予測される死亡事故数といった統計学的あるいは保険統計数理的な予測さえ、多くの人々が薄気味悪く思い、敵意をもつ。ましてや、個人の行動の予測・コントロールに至っては、ほとんど悪魔がやることとみなされている。

コントロールを否定する態度は科学的分析の自由な行使を妨害しており、その妨害がもたらす結果は深刻である。

スキナーは以上のように述べて本題に入って

いった。

人間の行動に関連する3つの領域があり、それらの3領域の実例をそれぞれ述べる。3領域とは「個人同士のコントロール」「教育」「政治」である。

まず、個人同士のコントロールについて。家族関係や友人関係、社会集団、仕事仲間、カウンセリングにおける人間関係、以上のようなもののなかで個人同士のコントロールが見られる。代表例は「賞賛」というコントロールである。賞賛が個人におよぼす影響は強いのだが、多くの人々が賞賛はコントロールであるという事実を見落としている。人間はたえまなく賞賛や非難によるコントロールを受けているのだ。

賞賛は文化の重要な一部分である。なぜならば、賞賛がなければ弱くなってしまおう行動が、賞賛という拍車によってしっかり発生し、維持されるからである。たとえば、ある人が所属する集団のために大きな危険をおかして行動したり、自分自身を投げうったり自分の財産を投げうったり、あるいは長い間苦しみに耐えたりしたときに、その人はとても賞賛され、尊敬され、愛されるのである。これらの行動はなんら絶対的な意味で賞賛されるものではないが、そうした行動を強めるためには、行動が賞賛される必要がある。

責任の概念や、それに関連する先見や選択の概念が、罰を用いたコントロールの技術を正当化することに使われる。ある人は自分の行動がどのような結果をもたらすかに気づいていたのか。その行動は故意であったのか。もしそうだとすれば、私たちがその人物を罰することは正当である。しかし、これはいったい何を意味しているのか。

選択・責任・正義などの諸概念が、効果的な強化や罰の実施とその後にくる結果とのつながりをたいへん不十分に分析させてしまう。なぜならば、これらの概念はコントロールの実施を明確なものにしたりコントロール技術を改善したりしようとする試みをあいまいなものにする種々雑多な意味合いを含んでいるからだ。そうした概念を用いれば、結局、人間行動を人から嫌われるような技術を使ってコントロールするしかなくなってくる。

ある人がある自動車を買おうとしていると



き、その人はなぜ他でもなくその車を選択したのだろうか。選択した理由は、その車が子ども時代にお気に入りだったおもちゃと同じ名称であるからかもしれないし、車を製造した会社が好きなテレビ番組のスポンサーだからかもしれない。その車を運転している美女や有名人のポスターを見たことがあるからかもしれない。もしかすると、車のデザインが気に入ったからかもしれない。馬力が強力で他の車を追い越せるという所有者の競争心を満足させるような車であるからかもしれない。以上の例から窺えることは、その人は自由に特定の自動車を選択したのではなく、なんらかのコントロールを受けた結果、特定の選択に至った、ということである。

現在、一般的に尊ばれている「自由」という概念は、この種のコントロールを認識したり、この種のコントロールに対応したりする準備をしていない。「責任」や「権利」などの概念も同様で、これらの概念は強制の形を取らない効果的な強化や罰をじゅうぶんに視野に入れることができないのだ。

個人同士のコントロールに関するスキナーの説明はこれで終わった。つぎは教育についてであった。

教育について。かつて教育の技術は嫌われていた。教師は生徒たちよりも年上で強く、生徒たちが逃れることができないような状況を作り、生徒たちに強制的なやりかたで学習させていた。体罰をおこなった教師たちも少なくない。

進歩主義的な教育は、嫌悪刺激を用いて教え込もうとするのではなく、「正の強化」を通して人道的に教えようとする方法である。しかし、放棄したいいくつかの強制的な手段をしっかりと肩代わりする方法にはなり得ていない。行動科学から派生した技術の一部門としての教育学は、今のところやや非能率的な段階にとどまっている。環境を操作して教育効果を高めようとする非常に有効な教育法は「洗脳」あるいは「思想コントロール」とみなされ、非難される。私たちは効果的な教育方法を判断する準備をまったく終えていない。教育の項は以上であり、つづいて話題は政治に変わった。

政治について。政治の世界ではたえず嫌悪的なコントロールがおこなわれてきた。国家

はしばしば罰則を与える力として定義されるし、一国の法体系というものは、個人の責任に関連した概念に基づいている。しかし、最近、こうした過去の発想・理論と現実とを調和させることが徐々に困難になってきている。政治が他の技術（たとえば、正の強化）を使用するときには、もはや「責任」の概念は適切ではなく、政治の理論も適用できなくなる。法律というものはやがて政治的コントロールに必要な技術をあつかうものになるに違いない。

私の小説『ウォールデン・ツー』<sup>(訳注2)</sup> に対して、さまざまな非難が寄せられている。この小説は、実行可能で、能率的かつ生産的な政治を実現するために行動科学を使用する、という内容のものである。しかし、「誰か特定の人物がその世界を計画した」という一点が非難を呼び起こしたようだ。非難した人たちが世界の果ての片隅でこのような社会に遭遇したら、ひとつの型と評価して、感嘆の声をあげるであろうに。

人間行動のコントロールに危険が伴うのは当然である。しかし、われわれは行動科学の力を否定したり、その発展を妨害したりしても、危険性から逃げだすことはできない。われわれが安心できるからという理由だけで、人間行動に関してこれまで親しんできた哲学にしがみついても、意味はない。

政治の要点は、どのようにして自由を維持するかということではない。要点は、どのような目的に対して、どのようなコントロールを用いるか、ということなのである。

以上がスキナーの発表であった。彼の最初の発表はこれで終了した。

## 5 討論・2 ロジャーズ：

討論はロジャーズの番となった。ロジャーズの意見陳述は「Some issues concerning the control of human behavior: A symposium」(Rogers and Skinner, 1956) では、約4ページにわたった。要した時間はスキナーと同じく約25分間だったと思われる。

ロジャーズは、まず、自身とスキナーの考えの一致点を述べた。

個人や社会が常に人間をコントロールしようとしてきたと見ることに異論はない。行動のコントロールが進歩しており、この進歩を

否定することが非現実的である点も私はスキナーと同じである。多数の知識人たちが人間行動に関する科学などは成立し得ないと考え、人間の行動は自由なものと考えている。心理学者同士ではこのことが論争とはならないが、心理学者以外の人々にとっては必ずしもそうではないようである。行動科学<sup>(訳注3)</sup>の知見は悪用されるかもしれない、それを防ぐために、人間行動の科学的コントロールに心理学者も大衆も関与すべき点も、スキナーと自分は一致している。

そしてロジャーズは、論争点、つまり一致していない点をまとめた。

誰がコントロールされるのか。誰がコントロールするのか。どのような種類のコントロールがなされるのか。最も大事なことは、どのような終着点や目標に向かい、どのような価値を追求して、コントロールがおこなわれるのか。このことに関しては、自分はスキナーとの一致を感じていない。

さらに、ロジャーズはコントロールという語と「影響」という語の違いを整理した。

- (1) BがAに対して、Aが発言できない状況で、Bが予測する行動をAに起こさせるとき、それは「外的なコントロール」である。
- (2) BがAに対して、Bの考えに対するAのある程度の同意を得たうえで、Bが予測する行動をAに起こさせるとき、これはBのAに対する「影響」である。
- (3) Aが、A自身の考えのもと、自分が予測する行動を起こすとき、これは「内的なコントロール」である。

スキナーは外的なコントロールと影響とを区別せず、どちらもコントロールという単一の概念にしている。これは混乱につながる。

ロジャーズは以上の整理を終え、そして本題に入った。「Some issues concerning the control of human behavior: A symposium」(Rogers and Skinner, 1956) の文中には「人間行動のコントロールに関する一般的な概念」という小題がつけられている。

人間行動への科学の適用という一般的な概念に含まれる要素は、以下の5つに分けられる。

- (1) どのような目標が選択されているのかという要素。ふつうは望ましい目標が選択

されているといえるが、ときに、ジョージ・オーウェルの『1984年』<sup>(訳注4)</sup>のような、権力者側にとって都合がよく、私たちの多くには不都合な目標が選択される場合もある。

- (2) 選択された終着点は具体的なものなのか、それとも「より良い世界の実現をめざす」的なごくあいまいなものなのか、という要素。どちらの方向の目標であれ、私たちは目標に向かって科学の方法で前進してゆく。
- (3) 目標に到達する条件や方法が見出されたとき、ある個人やある集団はその条件・方法を用いて他者をコントロールする力を手に入れようとする、という要素。
- (4) 個々の人間を目標に沿って行動させるという要素。人々は幸福になることが目標ならば幸福にさせられ、良い行動をすることが目標ならばそのようにふるまわれ、従順さが目標ならばそう仕向けられ、とにかく目標に応じた結果に至らせられる。
- (5) 以上の過程が成立したのち、その社会組織が価値を認める行動のみが生産されつづけてゆくという要素。

このうち、自分が賛成するのは(2)のみである。科学的方法は目標に到達するための優れた方法であると思う。

ロジャーズは「いくつかの瑕疵」という小題をつけた話題に移っていった。

スキナーは権力の問題をあまりにも過小評価している。行動科学の協力を受けた権力が科学者たちや各種慈善団体に用いられるということは歴史を振り返ってみても望むのは困難だ。行動科学者たちは現在のような態度でいると、ドイツのロケット工学者たちのようになるだろう。彼らはソビエト連邦やアメリカ合衆国を破壊しようとするヒトラーのために働いた。ところが、ソ連に捕えられるとソ連のために働くようになり、アメリカに捕えられるとアメリカのために働くようになった。行動科学者たちが科学を進歩させることだけに没頭するのは、権力の目標に奉仕することにつながる。人間行動の科学的コントロールの最大の欠点は、科学の到達点や目標や価値を拒絶・誤解・過小評価していることである。

つづいてロジャーズが語った小題「科学に関連した限界と価値」の部分では、(1) 科学でははじめに目標や価値の主観的な選択がおこなわれ、科学的研究はそれにしたがう、(2) この主観的な価値選択は常に科学的研究の外側になければならず、科学の一部に入りこむことはできない、という論題を提示した。そのうえで、

スキナーも自身の論文で前もって価値を選択することが必要と認めており、そして、人が幸福になることや良い行動を示すことや生産性をあげることを目標として掲げている。それらは私にはつまらない価値としか思えないので、現在、スキナーがそれらの目標を取りさげていることを嬉しく感じている。私は、スキナーがそうした目標を自分自身のためにではなく、他者のために選んだとしか思えない。私はスキナーが、行動科学者たちによって彼のために定義されたとおりに良い行動をとっている姿など見たくもない。『アメリカン・サイコロジスト』誌<sup>(訳注5)</sup>のスキナーの最近の論文には、彼は大多数の心理学者が定義するような意味では「生産的になること」を望んでいないことが示されている。ところで、私が彼に対して想像し得る最悪の運命は、彼がたえまなく幸福になることである。彼は多くの点で不幸であり、だからこそ私は彼を高く評価するのだ。

そして、「状況は絶望的か？」の小題のもと、ロジャーズはこのように述べた。

科学はひとりの人あるいは何人かの人々が主観的に選んだ目標を客観的に追求するものだ。主観的に選ばれた目標や価値は、科学の実験・研究によって把握することはできない。行動科学がおこなう人間行動のコントロールを語る際には、主観的に選ばれた目標を何に應用しようとしているかを深く考えなければならない。

行動科学は明らかに発展しており、コントロールの力をつけているが、その力はある個人やある集団が掌握することになるだろう。当該個人や当該集団は達成すべき価値・目標を独自に決めるだろう。私たちの多くが気づかないうちに、どんどんコントロールされるようになる。『ウォールデン・ツウ』や『1984年』で描かれたような状況がやってくる。深い哲学的レベルで、私にはこの2つの作品を区別できない。その状況は一気に到来するの

ではなく、小刻みに近づいてくるだろうが、だからといって心配な状況が根本的に変わるものではない。いずれにしても、スキナーが彼の著作で書いているように、われわれは、人間の自由の概念、選択する力、選択に対する責任、そして、科学以前の文明で文化的偶然による特産物としてかつて存在した歴史的珍事の人間個人の価値というものを、振りかえってみたい。

こうした傾向を注意深く観察する者はだれも、すでに述べたような道程が本当に起こると覚悟しなければならない。これは単なる空想ではない。そうしたことが本当に将来起こり得るのだ。では、それは避けられない将来なのだろうか？ 私は他の可能性もあることを、残された時間を使って語りたいと思う。

ロジャーズの発言はつづいた。以下は「代替的な価値」という小題内のものである。

人間は、成長の過程にある存在で、能力を発揮しながら自らの意義を高め尊厳にたどりつこうとする過程にある存在である。個々の人は自己実現の過程にあり、より困難で、そして豊かな、そのような経験を求めて進んでゆく。そうした過程は人が常に新しくなり不断に変化している世界に適応してゆくための過程である。それは、たとえば相対性原理がニュートン物理学を超越したように、将来のある日、新しい概念が提出されて知識が自らを超越する過程のようなものである。

主張はカウンセリングにおよんだ。

カウンセリングはBがAをコントロールする手段になり得るものだ。極端な用いられかたをされた場合は「洗脳」と呼ばれる。洗脳は人の人格を破壊し、その人を洗脳者の意のままに再構成しようとする。カウンセリングは本来そのようなものではなく、人の人格と行動を外的にコントロールする有効な手段として用いられる。

クライエント中心療法<sup>(訳注6)</sup>もまた行動のコントロールをおこなう。私たちはある態度をもってクライエントに臨む。クライエントはこの条件に関して発言できる場面はほとんどなく、したがってこのコントロールは外的なコントロールである。しかし、外的なコントロールはここまでだ。当該条件下でカウンセリングをおこなっていると、クライエントは自分で自分を方向づけることができるよう



になる。かたくなさが弱まり、自分の感覚を受けいれるようになり、一貫的・統一的になり、自分で選択した理想像に接近しだす。つまり、クライアント中心療法をおこなうカウンセラーによる外的なコントロールの後、個人による内的なコントロールが起こるのである。

ロジャーズの話は「人間行動のコントロールに関する可能な概念」という小題に進んだ。この小題は彼の既出の小題「人間行動のコントロールに関する一般的な概念」に対応させたものである。

私が主張している見解が、行動科学と人間行動のコントロールとの関連について一般的に考えられているものと、際立って対照的な概念であることは明らかである。対照をさらに強めるために、以下の可能性を、前に用いた段落と並行させながら列挙する。

- (1) 人間を自己実現のための変化の過程として価値づけることを選択することは可能である。また、創造性を価値づけ、知識が自己超越してゆく過程を価値づけることもできる。
- (2) 科学の方法を用いることでこれらの過程を進行させる諸条件を発見し、実験を継続することでこれらの目標に到達するためのより良い手段を発見することができる。
- (3) 個人や集団に対して最低限の権力やコントロールを用いるだけでこれらの条件を設定できる。現時点での知識によると、必要とされる唯一の権威は、対人関係においてある種の質的なものを確立する権威である。
- (4) これらの条件にさらされると、現在の知識によれば、個人はより自己責任を発揮しだすようになり、自己実現を進め、より柔軟になり、より創造的な適応を示すようになる、とされている。
- (5) そこで、最初に価値を選択すれば、価値、知識、適応技術、さらには科学の概念すらも継続的に変化してゆき自らを超越する、そのような社会体制が開始されることになるだろう。変化の過程としての人間に重点が置かれるようになるであろう。

私が述べている見解は、なんら特定のユートピアにつながるようなものではないことは

明白である。私は、自分が最も強調しているのは過程であり、たどりついた状態ではない、と明瞭に語っていると信じている。

小題「選択」が最終の発言であった。

行動科学は人々を奴隷化し、非個性化し、本人たちが気づかないようなやりかたでコントロールしようとする。人々を幸福にし、良い行動をさせ、生産的にすることもできる。このようなことにスキナーは関与している。しかし、私のほうは、行動科学の知識を利用しながら、人々を自由にし、建設的な変化をさせ、あるいは創造性を発揮させようとする。クライアントが目標に向かう自己指示性を高めることもできる。これらのことは、個人に対しても、集団に対しても、科学の概念に対してさえ、可能である。どちらのほうを選択するかは、私たちが決めなければならない。

私の結論として、科学は、われわれが達成したいと願う価値の個人的な選択なしには存在し得ない。そして、われわれが実現を願って選択した価値は、永遠に科学の外側に存在するであろう。われわれが選択した目標、求める目標は、それに到達するための科学の外に位置しなければならない。人間は主体的に選択する力を有している。人が、あらゆる科学的な営みから独立し、科学的営みに先行して存在でき、そのことが不変であるということは、私を勇気づける。個人として、また集団として、われわれが主体的選択の力を放棄しないかぎり、われわれは自ら作り上げた科学の奴隷になることはないのだ。

以上がロジャーズの発表だった。

## 6 討論・3 スキナー：

最後に、再度、スキナーの出番となった。スキナーの話は、英語原文のページ数では1ページ強であった。これまでの2つよりも時間が短くなり、約15分を使った。

私は、科学の営みが前もって目標を決めておくことや価値を選択しておくことを必要としているという考えかたに、同意できない。ロジャーズは価値の主体的な選択と呼んでいる。私にとって、そのようなことは、行動というものを調べる際に厳密な科学研究をおこなうことを放棄せよ、といっているように聞こえる。価値というものは、それが条件づ

けられたものであるかどうかは別にして、要するに強化刺激である。生活体はあらゆるものから強化を受けるが、それはあらゆることを選択するように至らされているということでもある。ロジャーズは多様なそしてしばしば矛盾した結果に至る選択に関心をもっている。私は自己コントロールの分析をおこなった際に、その件をすこし扱ったことがある。おいしそうなイチゴを、明日の湿疹の原因になると分っていて、今日食べるだろうか？こうしたことの判断は倫理の領域内のものである。

人間が倫理的・政治的・宗教的な特定の行動を示すのは、そのように強化されているからだ。ロジャーズが分類した内的なコントロールは、外的なコントロールと同じく、目標ではない。ロジャーズの主張は、開発されたコントロールの力を用いて、人々をコントロールなど必要としないような、またコントロールに反応しないような、そういう存在にしよう、行動科学的コントロールの力を否認することでコントロールの問題を解決しよう、そのようなものだ。これは、いわば「慈悲深い専制君主」<sup>(訳注7)</sup>の言説のようなもので、容認しがたい。

カウンセラーがコントロールせずに非指示的になるのは、そのほうがクライアントに対してより効果があると思うからであろう。ロジャーズが示唆している解決策はこのように理解できる。だが、彼は結果を正しく解釈しているのだろうか。クライアントが真に自己指示的になったという証拠があるのだろうか。クライアントが本当に理想や目標を内面的に選択したという証拠があるのだろうか。カウンセラーがたとえ選択をしなくても、カウンセラーがたとえクライアントの「自己実現」を促しているようなときでも、クライアントがもっと悪質なウソつきになろうとしたり上司を殺そうと企てたりすることなどに専門家として対応しようと準備している限り、カウンセラーはコントロールの外側にいるわけではない。また、カウンセラーが完全に手を引いたり、クライアントから離れたりしたときに、それでもクライアントにおよんでいる他の力はどうであろうか。クライアントの目標は本人が幼児期に受けた訓練や本人が所属する集団の慣習や本人の周囲にいる重要な

人々などから分離したものではない。カウンセリングは彼の世界のほんの小さな一部分にすぎないのである。

せきたてられ、小言をいわれる子どもは、発達を終えた大人とは異なる。その子は当初、母親から促されて動くが、のろのろしていると母親以外の環境からも罰を受け、のろのろせずに急ぐと母親以外の環境からも強化されるようになる。そして、その子の行動が変わる。子どもの行動は親の口やかましいコントロールを受けることから環境にコントロールを受けることに移行するのだ。これを、より高度に組織化された状態とでも、一層強さが増した現実への感受性とでも、好きなように呼べば良い。どう呼んだにしても、ここにある明白な事実は、その子が受けるコントロールが、親の言葉によるものではなく環境から発される別のものに移った、ということだ。こうしたことがカウンセリング場面でも起こるわけで、ロジャーズが語っているのはそのことであろう。

ロジャーズが『ウォールデン・ツー』とジョージ・オーウェルの『1984年』は区別できない」といったのを聞き、私は悲しくなった。これほど似ていないものはないのである。『1984年』という小説には邪悪で利己的な目的のために直接的かつ人々に嫌悪されるような仕方でコントロールがなされている様子が描かれている。これに対して『ウォールデン・ツー』の建設者は、自分自身も他人も何らコントロールをおこなわないコミュニティを建設した。

私たちが民主主義という財産に値するならば、科学のいかなる直接的で利己的な利用も拒否するはずである。しかし、私たちが知識や民主主義の目標に価値を認める場合、たとえ状況次第でコントロールする側の位置に立つことになっても、科学を利用すること自体を拒否してはならない。コントロールに対する恐怖は、生活を豊かにする賢明な計画への闇雲な反対・誤解を引き起こした。ロジャーズが賛同してくれるであろう表現を用いると、この恐怖を克服することで、私たちは人間として一層成熟し、まとめ、自らを実現することになる。

以上だった。

これをもってロジャーズとスキナーの1956年の



討論は終了した<sup>(原注2)</sup>。

## 7 ナイの要約とコメント：

ロジャーズとスキナーが実施した討論に対して、ナイ（1995）が詳細な整理をおこなっている。本論文では、まず、スキナーの最初の発表をナイが要約したものを引用する。なお、本章の要約や次章「8」の各種要約には、本論文が訳していない発言に関する言及も含まれている。また、引用文の訳語と本論文の訳語が異なる場合がある。一例をあげれば、ナイの要約において「制御」という表現がでてくるが、これは本論文では「コントロール」と訳した語である。さらに、ロジャーズの名前はロージャズになっている。

スキナーは、人間の行動が制御され得ることを強調した。彼は、このことは逃れようのない事実であると信じていた。個々の人間は、制御する人であるとともに制御される人でもある。スキナーは、行動の科学的実験的分析は、これらの制御の過程を明瞭に説明するデータを提供し、制御、教育及び政治などの人間の機能の諸分野の改善に活用できると信じていた。スキナーは、行動についての伝統的な見方（それは行動の原因を、しばしば、環境要因よりも個体の内部に帰している）は、環境場面を改善する試みの進歩を妨げると示唆した。そして、客観的、実験的に導き出された科学的技法（例えば、正の強化の適用など）の使用によって、よりいっそう生産的で社会的に有用な行動を発達させる方法を、科学が導くことを提唱した（p.191）。

つづいて、ナイ（1995）は、ロジャーズの発表を下記のように要約した。

ロージャズが主に保留することを求めたのは、制御を使用するさいの指針となるべき目的あるいは価値が何かという問題であった。さらにロージャズは、スキナーが、人間の力量の問題や、制御の対象者、制御者、制御の種類について適切な配慮をしていないと感じていた。ロージャズとスキナーは、ともに行動科学が行動の予測や制御の面で顕著な進歩をしたことについては同意したが、行動制御の知識が今後もさらに進歩するかについての見解や、科学の限界についての見解では、鋭い対立を示した。ロージャズは、主観的な価値選択が存在し、それは科学的な研究の外でなされるべきものであると信じていた。そし

て、科学の目的は必然的に主観的に設定され、その目的が科学者や科学的研究成果を利用する人々を導くと示唆した。ロージャズにとって、このような主観的な価値判断の役割は捨てることのできないものであった。すなわち、この価値は選ばれるものであり、それらは研究すべき問題や、用いるべき方法や、研究成果の受け入れと応用などを規定することによって、科学的研究を指図する。科学は科学自体の進歩を規定できない。それを規定する責任は、ロージャズによると、選択と決定を行なう人間にある。さらに彼は、行動の制御の中心となる領域で、科学的研究成果の活用についての主観的判断が必要であると主張した（p.191）。

ナイ（1995）の要約において、当該討論におけるスキナーの第2回目の発表は、つぎのようにまとめられている。

スキナーは、主観的な内的選択は科学と関連させて考察すべきであると反論した。スキナーによると、目的や価値の「選択」は、外的環境の状況から切り離されたところで生ずるのではないと示唆し、人間の主観性の重要性を強調するのは、人間が住んでいる世界をより良くするのに科学的研究成果を知的に活用することの妨げになると警告した。このシンポジウムでのスキナーの主張の要旨は、次のとおりである。（1）行動の客観的科学は、社会の病理及び個人の行動上の問題を修正するのに適用できる。（2）行動を制御する試みの効果は観察できる。そして、文化的な生活を促進する試みは変化させ得る。（3）主観的な価値選択を主張すると、環境が行動に及ぼす効果から目をそむけさせてしまい、事柄をあいまいなものとしてしまうだけである（p.192）。

ナイ（1995）は最後に、討論全体を総括した。

シンポジウムで提起された事柄は、当時解決されなかったし、今もなお解決されていない。ロージャズは、一貫して個人の感情、思考、及びその他の内的な経験の重要性を強調した。ロージャズにとっては、これらの経験が重要であって、科学はそれらを含めるべきであると考えていた。ロージャズによると、客観的な科学的方法の存在意義も認めるが、それらは主として個人の成長と充実を援助する手段として考えるべきものであった。人間

の発達とは流動的な過程であり、実現のための適切な機会が得られるならば、どこまで到達できるかの予測はできない。そこで、科学の概念もまた、新しく発生してくる人間の欲求や欲望に応じて、絶えず変化する状況であるべきだと感じていた。

これに対してスキナーは、行動の客観的な科学は、人類の生存のための条件を最善なものとするための最前線に立って、それに必要なデータを提供すべきであると信じていた。彼は、好むと好まざるとにかかわらず、外的要因が個人を操作し、個人の行動を規定することを指摘した。彼の見解によると、この事実に対応する最善の方法は、われわれが他者を制御しわれわれ自身が制御される種々の方法を、できる限り十分に研究することである。すなわち、行動の実験的分析によって、それに必要な情報が提供される。制御の事実を受け入れ制御が可能であるという科学的情報を得るならば、われわれは知的に計画を立てることができる。最善の仕方では「健康で、幸福で、安定した、生産的な、そして創造的な人々」を育てるように環境を構成することができる（スキナーの行動的アプローチが実効をあげると、このようなタイプの行動が結果するだろう、とスキナーは示唆した）(p.192)。

ほとんどまったくナイ自身の私見を交えていない、客観的で公平な総括である。

## 8 他の研究者たちの要約とコメント：

当該討論に関するコメントはおそらく多数存在すると思われるが、本論文で用いることができるのは9名の研究者たちによる7件のコメントである。発表年にしたがって引用する。

まず、宇津木（1972）は、

「スキナーへの」たいていの批判者たちの議論は、まず、人間をコントロールすることは間違っているという暗黙の前提から出発している。すなわち、外部からの力による介入がないかぎり、人間の行動は自発的なものであり、コントロールされていないものだという前提から出発するのである。しかし、育児や教育や社会的倫理のシステムが、現に人間の行動を強力にコントロールしているのを、彼らは見のがしているのである。さらに、これらの公式的なコントロールに加えて、社会

的相互作用のあるところでは、至るところでコントロールが行なわれていることを考えれば、個人がコントロールを受けていない存在だという考え方は全くの誤りだということがわかる。[中略] 本当の問題は、行動がコントロールされるか、されないかということではなくて、むしろ、「どんな種類のコントロールが、誰によってどんな目的のために行なわれるのか」という点にある。オペラント分析学者は、コントロールの種類については、ある解答を出しているが、あとの二つの問題は、科学による解答を越えた、社会（哲学）の問題であるとスキナーは考える（p.250）。

と解説した。スキナーの側に立った解説である。

パッカード（1978）はロジャーズのほうに賛同し、その賛同に沿って、討論におけるロジャーズ発言の一部分を取りあげた。

スキナーはこう提唱した。「人間よ、幸福たれ。知識豊富で技能に優れ、良き行動をなし、生産的たれかし」。スキナーの友人で思想的にはライバルである心理学者のカール・ロジャーズは、この目標のうちの二つ、「良い行動」と「幸福」という点でスキナーをからかい、スキナー君は自分のためではなく他人のためにこの二つの目標を選んだのだろう、と言った。「行動主義科学者の定義するような意味での『良い行動』なんか、スキナー君にはやってもらいたくない」。「幸福」という点に関しては、ロジャーズはこう言った。「ぼくが想像しうる限り、スキナー君にとって最も恐ろしい運命（生き方）は、スキナー君がたえず『幸福』になってしまうことだ」（p.580）。

三番目は、椎名（1982）である。

アメリカの世界的心理学者スキナーは次のように断言する。「ひとは各人それぞれに、芸術、音楽、そして文学などによって自己を表現し、自然を求め、意の趣くものを捜しあてるものだ、とわれわれは信じていた。行動を起こし始めるのは自分であり、ひとは自発的な気まぐれ行為さえ出来るのだと考えていた…。しかし、科学が教えることは、行動は外から個人に与えられる力（外力）により開始されるということであり、気まぐれということは、まだ行為の理由が見つからないという意味の別名だということだ…」。

これに対して反論するのは、やはりアメリカの現代の代表的心理学者ロジャーズである。「私はこの観点を理解出来るが、この主張は行動の科学における大きな逆説に目を向けることを避けている。科学的に検証するとき、行動は先行する原因によって決定されると解釈することは最善の策である。これは科学において犯すべからざる事実である。しかし、自覚ある人間が自ら選択することが出来るという事実は — これこそ人間であるための最も基礎的な要素であり、心理療法における核的な体験であり、またどのような科学的努力にも先行する存在であるが — われわれの生活の中で等しく偉大な事実である。自主的な選択の体験を否定することは、私にとっては、行動科学の可能性そのものを否定するほどに制限された見方に思える…」(p.120)。

スキナーは、この討論で語ったこととかなり似かよった内容の本、別のいいかたをすれば討論で用いた論文にもっと具体例を書き加えた本を、1971年に出版した。『自由と尊厳を越えて』(スキナー、2013) がそれである。討論用の論文と同じ主題を扱っていることは同書の「謝辞 (p.277)」で説明されている。同書に対してヘップ (1987) が肯定的な感想を発表したが、この感想は、したがって、1956年の討論におけるロジャーズやスキナーへの感想にもなり得る。

犯罪行動や攻撃を(予期的)強化の利用によって制御することが実践的ではないとすると、社会全般にわたってそれ以外のすべての行動の制御をなし遂げるのは、その十倍以上も大変である。スキナーの論議は、ことばの両面の意味でアカデミックであった。すなわちそれは、人間学習についての彼の研究のなかに、そしてまた、彼の弟子や他の志を同じくする同僚たちの、精神病院の奥の病棟にいる患者たちに対する、ないしは副次精神病理学における行動変容に対する研究のなかに、はっきり姿を現わしている実践的問題への関心の表明なのである。[中略] スキナーの見解のいくつかは、原理的には、まちがっているかもしれない。しかし実践的には、すばらしい成果を収めてきており、社会科学のどんな彼の批判者のそれよりも、社会に対して価値ある貢献を行なってきた。行動主義を、思慮なき禁治産者として語ることは、無知か偏見か、ないしはその両者である。それ

はもちろん、学識あるものの証拠とはいえない (p.32)。

山本 (1990) は、討論で触れられた話題のうち、価値選択の問題とコントロールの問題を重視した。

ロジャーズは、科学研究にはまずその前提として主観的な価値選択が必要であるとする。さらに人間を、自ら潜在能力を発展させ自分の持つ価値を達成していく過程にあるものととらえるならば、科学的知識は個人を統制から解放させ自己指示的になるよう援助するものと考えている。一方、スキナーはロジャーズの言うような価値選択は不要であり、価値とは行動を強化する要因にすぎないとする。さらに人間の行動はつねに統制されるものであり、科学的知識はより効果的な統制を可能にする。個人が自己指示的になるということは、統制から自由になることではなく統制の種類が変わるだけであるとする (p.586)。

フレイジャーとファディマン (1991) は、「Some issues concerning the control of human behavior: A symposium」(Rogers and Skinner, 1956) 内でのスキナーのロジャーズ批判および他の心理学者たちによるロジャーズ批判論文の読後感として、「ロジャーズに対する筋の通った感情的な批判を読むと、次の二つの結論しなくなってしまう。一つは、彼らが異なった種類の患者を見てきたという結論。もう一つは、彼らが相手がみずからの道を見いだすことを信じる、というロジャーズの考えを単に受け容れないという結論である (p.391)」との感想を語った。後者がスキナーへの言及となっている。

最後に、カーシェンバウムとヘンダーソン (2001) は、

スキナーの論点は、個人および社会の発達過程に、強化理論 (reinforcement theory) を賢明に、かつ望むらくは人間的に適用する、というものであり、それは大いに説得力のあるものであった。いずれにせよ、自由とか選択ということは幻想にすぎないのであり、人間の現在の行動を決定しているのは、過去の強化の結果にすぎないのだ、とスキナーは論じた。ロジャーズもまた同じくらい雄弁に、自由と選択は決して幻想ではなく現実の現象であることを論じた。さらにロジャーズは、人間を非人間化し、外部からの



強化のみによって人間を統制しようとする科学は、独裁者に道をひらき、社会を容赦なく全体主義的な、オーウェルの描いたような未来へと導くものだ、と警告したのである(p.3)。

こう書いて、討論で、スキナーに説得力があったこと、ロジャーズも雄弁に反論したこと、を認めた。

## 9 本人たちの振り返り：

討論を終えて長い年月がすぎた時期に、ロジャーズもスキナーも当該討論に関する思い出を語った。以下は、ロジャーズがデイビッド・ラッセルという研究者に語った話、スキナーがリチャード・エヴァンズという研究者に語った話、である。他に、スキナーが自身の本に書いたこともつけ加えた。

カール・プリブラムという学者は、1956年の討論ではロジャーズのほうが優勢だったと評した(ロジャーズ、ラッセル、2006)。これは、ロジャーズがプリブラムと話して直接聞いたことを、ラッセルに伝えた情報である。

〔討論の〕結果が注目に値します。勝ったのは私なのか、スキナーなのかは、その人の見方次第です。カール・プリブラムが何年か後に語ってくれたのが、面白かったです。「面白い論争だったよ。でも悪い人が勝ったな」「どういう意味だい?」「君が勝ったってことさ」。当時、彼は行動主義的だったのです(同、p.171)。

勝ち負けの話題がでていますが、この件について、Cohen (1997) は「どちらの論者が勝ったのか、判定するのはむずかしい。ある意味では、ロジャーズとスキナーのどちらもが勝ったといえる。なぜならば、彼らはこの討論をおこなったことで、彼らのそれぞれの心理学の学派における主役としての声望を一層確かなものにしたからである(p.163)」と分析した。

ロジャーズは「彼〔スキナー〕と私は一つの点で似かよっていました。二人とも論理的にギリギリまで突きつめていきます。彼はとても正直な相手でした(ロジャーズ、ラッセル、2006、p.170)」との述懐も残している。

ロジャーズ(ロジャーズ、ラッセル、2006)は他の感想も語った。

スキナーは基本的哲学を突きつめて考える面では孤独だと思います。行動に影響を与え

るだけで、生きるということを考える全体的哲学的根本とは言えないからです。〔中略〕何を強化するかを決定を下す人びとが必要ですが、その必要性は誰の目にも明らかです。その決定を下す人びとは、利益を受ける人びとであり得、人間を愛する人びとでもあり得ます。最高の人だけを求める人びとでもあり得ます。自己中心的な独裁的な人びとでもあり得るのです。だから、彼はそこを見つめなかったと私は感じます — 技術があるなら使うべきだ。そして疑問は、誰がそれを使うのか? それこそ、本当に重要な問題です(p.172)。

エヴァンズ(1972)の報告では、スキナーはのちにこういった。

彼〔ロジャーズ〕とは、人間の尊厳とか、人間の根本的なコントロールの方法について数回議論を戦わせたことがあります。私の意見が他人に迷惑を与えるからといって、特に私は心を悩ますわけではありませんし、彼らの苦痛をなだめるために何か手を打とうとは思いません。私の学問的な仕事は、事実を報告しただけですし、私が効果的な公式だと考えるものを報告したにすぎません(同、p.165)。

エヴァンズ(1972)は、さらにスキナーが、

すべては方法の問題です。私がカール・ロジャースと議論したときの最重点もそれでした。人びとがロジャースの望んでいるような人に近づくことになれば、私はうれしいと思います。私は独立人が好きです。独立人というのは、自分のなすべきことを他人に命令される必要のない人のことであり、それは正しいことだからやれと言われても、やるようなことのない人のことです。しかし、そういう独立性はどうしたら作り出せるのでしょうか。私は、ロジャースが提唱しているものよりも、もっと効果的な方法を提示することができますと思っています。私たちの心の中に内的な決定者がいるのだという考え方は妥当なものではないと私は考えています(p.109)。

と発言したことを、自著で紹介した。

自身の、内的な決定者の想定は妥当ではないという見かたに関連して、同じくエヴァンズ(1972)の書で、スキナーは一層くわしい説明をしている。

非行者を改心させる場合を考えてみましょう。心理学者や精神医学者のなかには、それが可能だと考えている人がいますが、彼らが

うまく改心させることができたとしても、それは、社会が何らかの仕方で重要なコントロールの仕方を彼の内部に植えつけておいた場合に限ります。この点について私はカール・ロジャースと話しあったことがあります。彼の主張によると、いずれにしても、患者は自分の問題を解決しようとするようなコントロールする力を彼自身の内部にもっていることがわかると思います。ロジャースの方法は、たとえば、ユダヤ的キリスト教の伝統に忠実なために患者になった者には有効ですが、それは、ユダヤ的キリスト教が彼の善行の根拠になっているからなのです。しかし、もしその患者が「ああ、わかった。私は主人を殺さなければならない」と突然宣言したとすれば、そういう患者を診察室から一步でも外に出してはいけません。「君は自分の問題を解決することができるのだ」などと患者に言うてはいけません。どんな解決法にも、その背後には、かならず何かコントロールするものがあるのです。もし、患者の問題が外部からの嚴重なマイナスのコントロールによって生じたものとすれば、彼をそれから解放してやる必要がありますが、患者を改心させようとしても、彼自身のものは何もないのですから、改心させることはできません。こういう患者に絶対的な自由を与えてはいけません（エヴァンズ、1972、p.59）。

最後の情報となるが、スキナー（1975）は『行動工学とはなにか』という書物において、本討論で主張したこととかなり近い内容の意見を記した。

「必要なことは」とカール・ロジャースは言っている。「コントロールでなく、援助を提供する新しい精神療法の概念である」だがこれは、あれかこれかではない。コントロールを及ぼしている環境を整えることによって人を援助することができる。そしてもし私が正しければ、そうしなければ人を援助することはできない。いわゆる人間学的心理学者は、もし何らかの効用をそもそももつのであれば、人をコントロールしている。だが自分のやり方を自分で分析することを彼らは決して許さないのである（p.216）。

ロジャーズが考える「非コントロール」的なものは、スキナーから見れば依然としてコントロール内のものだ、という指摘である。

## 10 考察：

討論は1956年11月30日の『Science』誌に掲載された。タイトルは「Some issues concerning the control of human behavior: A symposium」(Rogers and Skinner, 1956) であった。長さは、同誌1,057ページから1,066ページまでの、全10ページだった。ただし、第1,066ページ目は大半が他者による別の論文である。掲載記事はほどなく公刊され、心理学の世界で最も版を重ねた出版物となった（ロジャーズ、2007）。日本では、1967（昭和42）年に「人間行動の統制に関する二、三の問題点：シンポジウム」（ロージャズ、スキナー、1967）との題で訳されて、『ロージャズ全集・第12巻：人間論』に収録された。

討論を読んで、まず気づくことは、ロジャーズもスキナーも相手の名前を語るときに名字を呼び捨てにしていることである。ロジャーズは「スキナー博士」と呼ばずに「スキナー」と呼び、スキナーも「ロジャーズ博士」と呼ばずに「ロジャーズ」と呼んでいる。学術論文内で人名に敬称を略すのは通例であるが、本討論用に書かれた論文は、本人を目の前にして読みあげることが論文執筆時から前提となっていた。そのことに関わりなく呼び捨てであった点に、軽い違和感をおぼえる。あるいは、両人の相手に対する闘争心が、この部分にあらわれているのかもしれない。

つぎに、ロジャーズが論文内で用いた「私たち」「われわれ」は、「行動科学からコントロールされる側としての自分たち」というニュアンスのものが比較的多かった。スキナーの「私たち」「われわれ」は、「心理学者たち」や「アメリカ人である私たち」さらに「（総称的な）一般の人々」というふうに、まちまちな意味合いだった。討論当日の聴衆は、おそらくは心理学者が多数を占めていたであろうが、それでもロジャーズの「コントロールされる側としての自分たち」という表現は聴衆を味方に引きこむ力が強かったのではないかと想像される。論者としてのロジャーズの「討論に慣れた（Cohen, 1997, p.157）」面が窺える。

さて、討論では、スキナーはおおむね科学の可能性（とりわけ行動科学の可能性）を語り、ロジャーズは行動科学が人に災いとなり得る懸念を語っている。これは、たとえば原子力の研究を進める科学者に対して、原子力が環境汚染を引き起こす可能性を訴える学者や市民団体との対立に、構図が似ている。スキナーのほうが楽天的に科学の力を信じ、ロジャーズは憂慮している。原子力

の研究開発は環境汚染につながった。ロジャーズが指摘したことに連続した問題であり、したがって、彼が討論で強調したことが杞憂だったとはいえない。ジョン・ザイマン（1981）もロジャーズと同じく「専門的な技術に対する懐疑主義は、おそらく今日でもなお、社会科学や行動科学のほとんどの主張に対する、もっとも賢明な対応策であろう（p.401）」という意見を述べている。一方、原子力に端を発する環境汚染を予防・解決する力もまた、科学のなかから生みだされてくるかもしれない。トープッチュ（1972）は「科学の影響そのものを科学的に把握し、できるだけ望ましくない副次的結果からわれわれを守るよう努力しなければならないのである。この道はすでにいくつかの分野では成功裡に踏み出されている（p.261）」と、また、ロジャー・ニュートン（1999）は「テクノロジーの力によって、現代の紛争はより破壊的になったとはいえ、科学に内在する価値はそのような紛争につながる原因を減じるのに使える。[中略] 自然界についての知識や理解は、無知や迷信によって恐怖を商売にするよりもずっと人類に貢献する（p.310）」と論じる。これはスキナーが討論で主張したことに近い。ロジャーズとスキナーそれぞれの主張の違いは、ナイ（1995）が推断したように「当時解決されなかったし、今もなお解決されていない（p.192）」。「いつまでも解決には至らない命題なのではないだろうか。

ロジャーズが同様に危惧した権力と行動科学とが結びつくという問題も起こり得る問題であり、コーエン（2008）によれば、スキナーもそのことを認めている。ただし、これは行動科学に限定された問題ではなく、他の諸科学も同様に有している問題である。行動科学だけを選択的に責めても何の問題解決にもつながらないだろう。発展する科学をいかに民主的な形で権力に結びつけるかを工夫することのほうがより有益と考えられ、スキナーが力説したのはそれであった。

逆に、クライアント中心療法の件になると、ロジャーズのほうが楽天性を示し、自身のカウンセリング法は非人間的にクライアントを操作するものではない、とした。スキナーは懐疑的で、クライアント中心療法であれ他のカウンセリング法であれ、人を操作する関わりであることに違いはない、と述べた。これは、スキナーからばかりではなく、ロジャーズ陣営からもでている疑問である。アントニー・バートン（1985）はロジャーズのもとでクライアント中心療法を学んだカウンセ

ラーであるが、「治療者は実際クライアントの中にあるものを引き出しているにすぎない」としており、感情を受けとめたり、それに反応したり、それを形づくったりする治療者の、感情に対する態度そのものの中にきわめて特殊な様式や方法があることに、けっして気づいていない（p.278）」と述懐し、ロジャーズ派が操作を無自覚的におこなっていることを指摘した。ロジャーズとスキナーに話をもどすと、両者のこのような考えかたの違いは、臨床家と研究者の違いに由来しているといえるかもしれない。ロジャーズは研究も種々実施したが基本的な立ち位置は臨床家であり、スキナーは臨床をほとんどおこなったことがない実験心理学者だった。ロジャーズは臨床活動で得た体験に依拠しながら発言し、スキナーはごく客観的に臨床の場で生起していることを分析したわけである。

臨床家と研究者の対立というものに加えて、ロジャーズとスキナーのあいだには、人間性心理学者と行動主義心理学者の反目も潜んでいる。アンシェン（1974）は、ロジャーズやスキナーとは別件で「科学者とヒューマニストの二律背反（p.227）」という表現を使った。まさにそれが両者間に横たわっていた。室井（2000）も、

「技術」の専制に抵抗するもう一つの「技術」として発展してきたのが「近代芸術」であり、人文諸科学であった。これらの領域は、固定された合理主義的世界観や実証主義的イデオロギーから成る自然科学のそれとは異なる、もう一つの「意識」や「世界」の可能性を、一貫して提起し続けてきた。[中略] 合理主義的、客観的世界観や、人間の意義に対する固定したものの見方を疑い、知覚や経験の在り方に関心をいさぐことによって、世界と人間との別な関係の在り方を探り、別な形の文化を作り出そうとしてきたのである（p.120）。

として、科学と人間性心理学の母胎である人文諸科学との世界観の乖離・葛藤を検討している。この室井の発言もまた、ロジャーズとスキナーの討論について語ったものではない。

つぎの考察に進む。ロジャーズが討論で主張した事柄のうち、4点について、弱さや矛盾を吟味する。

まず第一に、ロジャーズは小題「人間行動のコントロールに関する一般的な概念」の（3）で、科学で明らかになった何らかの条件や方法を誰か



が悪用する成り行きを懸念した。もっともな懸念と思われる。ところが、ロジャーズが後年集中的に実施したベーシック・エンカウンター・グループは、アメリカを中心にカルト団体や悪質商法組織において望ましいとはいえない利用のされかたをしたのである（塩谷、1997）。ロジャーズがスキナーの行動科学に対して危惧し声を大にして警告したことが、結局、自身のカウンセリング法にも降りかかったことになる。なお、同様のことは、以下で見るとおり、スキナーの側にも起こった。

スキナーの影響が強かった頃、アメリカの一部の刑務所に、オペラント条件付けによる行動修正が採り入れられたことがある。「正しい」行動をすれば、ご褒美が与えられるというところまでは、まだ良かったのだが、そうでない行動をした場合に、独房に閉じ込めたり、体を拘束したりするといった罰の方がエスカレートしてしまった。囚人や人権擁護団体の猛反発へと発展し、結局、無残な失敗に終わった（岡田、2012、p.152）。

学術的な知識や技術を誰がどのように用いるかは予測がつかず、また取り締まることも困難なことなのである。

第二に、ロジャーズは討論の全般にわたり行動科学を用いたコントロールを批判したが、この批判には脆弱な点がある。それは、行動科学が発生する以前は人々に対してコントロールがなされていなかったのかどうかということに関する自問自答の不足である。いうまでもなく、行動科学とは無関係に、歴史上、人の世においてあらゆるコントロールがなされてきた。たとえば、紀元前17世紀に中国の殷王朝でスタートしたと考えられている「封建制」は君主が貴族をコントロールする制度であり、紀元前6～5世紀の古代アテナイで実施された「陶片追放」は政治的に問題ありと目される人物の台頭を防ぐためのコントロール法であった。3世紀、卑弥呼は呪術の力で人々をコントロールしたといわれる。17世紀の日本で公布された「武家諸法度」は徳川幕府が主として諸大名をコントロールするための法律だった。ほぼ同時期、イギリスでは「文民統制（シビリアン・コントロール）」が登場している。行動科学が人をコントロールする方法を独自に編みだしたわけではないのである。科学によるコントロールについては、湯川秀樹（湯川、梅棹、1967）が「いろいろな働きをコントロールする、制御する科学が飛躍

的に進むとか、いままでは科学の専門への細分化が激しかったけれども〔中略〕まとめたりコントロールしたりする方に、科学自身の重点が移っていったら、ある程度は解決できるかもしれん（p.124）」と発言した例もあり、科学的コントロールを模索する科学者は決してスキナーだけではない。

第三に、ロジャーズは「洗脳」に対して否定的なコメントをしているが、彼は討論の前年の1955年にC I A（アメリカ中央情報局）から依頼され、アメリカの諜報員・軍人たちが敵国に捕われた際に洗脳に抵抗できるための、また、ソビエト連邦から送られてきている諜報員たちを洗脳するための、効果的な方法の開発に協力していた（Cohen、1997）。国家機密であるため、協力の内容に関するくわしい情報は入手できない。それにしても、洗脳に言及した彼は、自分自身のこうした活動については、どのように考えていたのだろうか。一般的に、討論の当該部分でロジャーズが示した態度は「自家撞着」もしくは「自分のことを棚にあげている」と呼ばれる。

第四に、ロジャーズはスキナーのオペラント条件づけと自身のクライエント中心療法とを同列のものみなしている。同列とみなしているので、一方が正しければ、他方が正しくない、という結論に至る。しかし、両者は同列のものではない。オペラント条件づけは、動物や人間の行動の定着・消失のメカニズムを解説した理論である。「強化」と「罰」が中心概念だ。ロジャーズのクライエント中心療法においては、カウンセラーが態度条件を維持してクライエントに接すると、クライエントは自身の力で変化してゆく、とする。これは結局、オペラント条件づけというメカニズム内の動きといえる。つまり、カウンセラーが温かい言葉かけをし、それによってクライエントにある種の望ましい行動が増加する場合は「正の強化」であり、カウンセラーの温かい言葉によってクライエントにおける何らかの問題行動が減少する場合は「正の罰」なのである。オペラント条件づけという学習理論は、いわばベルトコンベアの仕組みの解説であって、ロジャーズがいうクライエント中心療法の受容や共感や自己一致はそのベルトコンベアの上に乗っている中身（コンテンツ）である。オペラント条件づけ的に表現すれば「強化刺激」や「罰刺激」なのである。既出のスキナー（1975）の発言「あれかこれかではない（p.216）」は、妥当といえる。

以上が4つの補足説明である。

最後に、KirschenbaumとHenderson (1990) がコメントしたとおり、本討論は「意義あるイベントであったものの、比較的短時間で終わったこの意見交換は、討論とは呼びにくい (p.81)」面があった。考えを自由に丁々発止させる討論ではなかったからである。とはいえ、限られた時間のなかで、朗読によって、ふたりは遠慮なく、率直に、自分が信ずるところを主張し、相手に敵対した。このとき、ロジャーズは「行動科学や行動コントロールに関してロジャーズならばこのような見解を示すだろう」と想定される見解を提示し、同様に、スキナーも「行動科学や行動コントロールに関してスキナーならばこのような見解を示すだろう」と想定される見解を提示した。その意味では、やや意外性が乏しい討論であったといえるかもしれない。

#### 原注：

- 1) 1956年のアメリカ心理学会年次大会で、当該シンポジウムとは別に、ロジャーズは「特別科学貢献賞」を授与された。ウルフギャング・ケーラーとケネス・スペンスが同時受賞者だった。ロジャーズの受賞理由は「心理療法について検証可能な理論を定式化したこと、また、その方法の価値を示し、かつ、その理論の含意を探究・検証する広範にして体系的なリサーチを行ったこと (チューダー、メリー、2008、p.193)」であった。
  - ・キース・チューダー、トニー・メリー [小林孝雄、羽間京子、箕浦亜子訳] (2008)、「リサーチに対するパーソン中心アプローチ」(収録：キース・チューダー、トニー・メリー『ロジャーズ辞典』)、金剛出版。
- 2) ロジャーズとスキナーは本討論を終えたのち、1960年、1962年、1964年、にも1対1または複数対複数での討論をおこなった。二人は計4回、討論の機会をもったことになる。

#### 訳注：

- 1) マキアヴェッリ (1469~1527) は、16世紀の初めごろに『君主論』(1998) を発表し、君主政体のありかたを説いた。同書内で、たとえば「君主たるものは [中略] 冷酷という悪評など意に介してはならない (p.125)」「恐れられる存在にならねばならない (p.127)」などの進言がなされている。

・ニコロ・マキアヴェッリ [河島英昭訳] (1998)、『君主論』、岩波文庫。

- 2) 『ウォールデン・ツウ』は、1948年、スキナーが執筆したユートピア小説である。T・E・フレイジアという主人公が行動主義心理学の原理を応用して建設した理想郷を、外の世界からの来訪者たちに紹介する、という体裁をとっている。日本では、下記の題名で出版された。

・B・F・スキナー [宇津木保、うつきただし訳] (1969)、『心理学的ユートピア』、誠信書房。

- 3) 関・犬田・吉村 (1970) によれば、行動科学は、1940年代の終わりごろから1950年代の初頭にかけてアメリカで成立した学問体系である。実証を手段として行動の一般理論構築をめざした。歴史学・人類学・政治学・社会学・社会心理学・心理学・精神医学・医学・生理学・生物学などがこの行動科学に参入した。したがって、スキナーの行動主義心理学だけが行動科学ではないのであるが、討論では、ロジャーズは主にスキナーの行動主義心理学を念頭に意見を述べている模様である。

・関寛治、犬田充、吉村融 (1970)、『行動科学入門：社会科学の新しい核心』、講談社ブルーバックス。

- 4) ジョージ・オーウェル (1903~1950) の『1984年』は、ディストピア (逆ユートピア) 小説で、1949年に発表された。小説では、市民生活が政府によって監視され、市民の行動がコントロールを受けている様が、重く描かれている。

・ジョージ・オーウェル [新庄哲夫訳] (1972)、『1984年』、ハヤカワ文庫。

- 5) 『アメリカン・サイコロジスト』誌は「アメリカ心理学会」の学会誌である。各種行事の連絡や学術論文が掲載されている。

- 6) クライアント中心療法は、ロジャーズが創始したカウンセリング法。来談者中心療法とも呼ばれる。この療法において、カウンセラーは受容や共感の態度でクライアントに接し、指示やアドバイスはほとんどおこなわない。

- 7) ソーン (2003) によれば、医学者のジェフリー・マッソンも、1989年にロジャーズのことを「慈悲深い専制君主」と弾劾した。慈悲深い専制君主という語の語源は、ソクラテスにまで遡ると考えられる。ソクラテスは『国家』(プラトン、1979) のなかで、

僭主 (独裁者) となった当初、はじめの何

日かのあいだは、出会う人ごとに誰にでもほほえみかけて、やさしく挨拶し、自分が僭主（独裁者）であることを否定するだけでなく、私的にも公的にもたくさんのことを約束するのではないかね。そして負債から自由にしてやり、民衆と自分の周囲の者たちに土地を分配してやるなどして、すべての人々に、情ぶかく穏やかな人間であるという様子を見せるのではないかね（p.230）。

と語った。ただし、ソクラテスがいう慈悲深い専制君主とは、「最も劣悪で最も不正な人間（同、p.265）」に即座に変身してしまう存在、という意味のものである。スキナーやマッソンが使った同語は、専制君主であるという実態を慈悲深さのオブラートに包んでいる、という意味合いであった。

- ブライアン・ソーン [上嶋洋一、岡村達也、林幸子、三國牧子訳] (2003)、『カール・ロジャーズ』、コスモス・ライブラリー。
- プラトン [藤沢令夫訳] (1979)、『国家（下）』、岩波文庫。

#### 引用文献・和書（50音順）：

- 宇津木保 (1972)、「スキナーの心理学をめぐる」(収録：R・I・エヴァンズ [宇津木保訳]『B・F・スキナー：人と思想』)、誠信書房。
- 塩谷智美 (1997)、『マインド・レイプ：自己啓発セミナーの危険な素顔』、三一書房。
- 岡田尊司 (2012)、『マインド・コントロール』、文藝春秋。
- 椎名健 (1982)、「人間はどこまで自由か：ひとつの心理学的論争」(収録：小川捷之、椎名健『心理学パッケージ：不思議な世界・心の世界』)、ブレイン出版。
- 室井尚 (2000)、『哲学問題としてのテクノロジー：ダイダロスの迷宮と翼』、講談社選書メチエ。
- 山本聡 (1990)、「ロジャーズ・スキナー論争」(収録：國分康孝『カウンセリング辞典』)、誠信書房。
- 湯川秀樹、梅棹忠夫 (1967)、『人間にとって科学とはなにか』、中公新書。

#### 引用文献・訳書（50音順）：

- ルース・ナンダ・アンシェン [神谷不二訳] (1974)、「ヒューマニズムの展望：伝統の未来」(収録：ハンス・J・モーゲンソー『人間にとつ

て科学とは何か』)、講談社現代新書。

- R・I・エヴァンズ [宇津木保訳] (1972)、『B・F・スキナー：人と思想』、誠信書房。
- ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン [伊東博、村山正治訳] (2001)、「第V部 人間の科学」(収録：ハワード・カーシェンバウム、ヴァレリー・ランド・ヘンダーソン『ロジャーズ選集（下）：カウンセラーなら一度は読んでおきたい厳選33論文』)、誠信書房。
- デイヴィッド・コーエン [三宅真季子訳] (2008)、『心理学者、心理学を語る：時代を築いた13人の偉才との対話』、新曜社。
- ジョン・ザイマン [松井卷之助訳] (1981)、『社会における科学（下）』、草思社。
- バラス・F・スキナー [犬田充訳] (1975)、『行動工学とは何か：スキナー心理学入門』、佑学社。
- B・F・スキナー [山形浩生訳] (2013)、『自由と尊厳を越えて』、春秋社。
- E・トーピッチュ [生松敬三訳] (1972)、『イデオロギーと科学の間：社会哲学（上）』、未来社。
- ロバーツ・D・ナイ [河合伊六訳] (1995)、『臨床心理学の源流：フロイト、スキナー、ロージャーズ』、二瓶社。
- ロジャー・G・ニュートン [松浦俊輔訳] (1999)、『科学が正しい理由』、青土社。
- ヴァンス・パッカー [中村保男訳] (1978)、『人間操作の時代』、プレジデント社。
- A・バートン [馬場禮子訳] (1985)、『フロイト、ユング、ロジャーズ』、岩崎学術出版社。
- R・フレイジャー、J・ファディマン [吉福伸逸訳] (1991)、『自己成長の基礎知識・2：身体・意識・行動・人間性の心理学』、春秋社。
- D・O・ヘップ [白井常、鹿取廣人、平野俊二、鳥居修晃、金城辰夫訳] (1987)、『心について』、紀伊國屋書店。
- C・R・ロージャーズ、B・F・スキナー [村山正治訳] (1967)、「人間行動の統制に関する二、三の問題点：シンポジウム」(収録：カール・R・ロージャーズ『ロージャーズ全集・12：人間論』)、岩崎学術出版社。
- カール・ロジャーズ [畠瀬直子訳] (2007)、『新版 人間尊重の心理学：わが人生と思想を語る』、創元社。
- カール・R・ロジャーズ、デイビッド・E・ラッセル [畠瀬直子訳] (2006)、『カール・ロジャー



ズ 『静かなる革命』、誠信書房。

引用文献・英書（アルファベット順）：

- Cohen, David (1997), Carl Rogers: A critical biography. London: Constable and Company.
- Kirschenbaum, Howard & Henderson, Valerie Land (1990), Carl Rogers: Dialogues, London: Constable.
- Rogers, Carl R. & Skinner, B. F. (1956), Some issues concerning the control of human behavior: A symposium, Science, New Series, Vol.124, No.3231.